

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻3月号(通巻536号)

風土

3



鎌
鼬

神
蔵

器

七十に七たす冬の花わらび

初日さす黄瀬戸にすすり溜りかな

動くもの雲とすずめと初景色

初夢や水汲みにゆく亡妻と会ふ

桂郎の拈華微笑や臘梅咲く

はるかなる雲は天才水仙花

武相荘

臘梅や新聞受けに餅の白

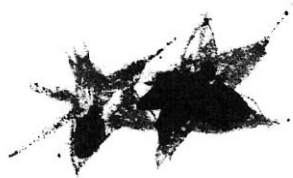
跪く白佗助の太郎冠者

小面に会ひぬ晴天の鎌鼬

百年の大黒柱寒の明く

竜の玉人におくれしあそびかな

立札やガラスに咲いて寒椿



竹間集

同人作品



ある日・その時（一）

浜 明史

助六も長兵衛もぬる羽根日和
今年また来し代筆の年賀状
山笑ふ気配を空の飛行雲
冬麗や尾根の透けぬる柞山
酸素吸ふ人日の月まんなまるく
喫煙の自戒ゆさぶる鯡起し
露の臺これより右へ余生かな

海鼠舟

浜 福恵

大年や歩き疲れし靴を拭く
枇杷の花内浦の邑つながらぬ
女らにまぶしき海や船出初
大潮の江にいさぶられ海鼠舟
太陽と北風を載せ釣筏
母許ははがりの土やはらかし芹を摘む
遠き世のうからのこゑや鯡を焼く

寒の入

蓮尾あきら

さすらひの波をありどの冬鷗
つつぬけの空へ船笛寒に入る
砂丘ゆく遠まはりして冬満月
横利根に寒釣り並ぶ日の出かな
晴天の塀より出でぬ寒椿
ひとところ風が舞ふなり寒牡丹
すき間なき一寒灯の舟溜り

去 年 今 年

— 塩田 博久 —

流 感 の ワ ク チ ン 待 つ も 年 用 意
テ レ ビ の 煤 払 ふ 天 皇 誕 生 日
煤 逃 げ て 画 廊 巡 り し 疲 れ 可 な
来 る 人 も な き 門 口 に 松 飾 る
紅 白 嫌 ひ 第 九 も 嫌 ひ 年 送 る
年 の 行 く 音 を 聞 か む と テ レ ビ 消 す
旅 の 子 の 電 話 受 け つ つ 年 を 越 す
乱 読 の 机 そ の ま ま 去 年 今 年
交 番 に 回 転 灯 や 去 年 今 年
枯 園 の 薔 薇 紅 白 に 初 日 可 な

初夢の中締め切りのありにけり
朝刊の瘠せて届きし三日かな
江の島三句
石段の果てに冬空初詣
一遍の島井戸飾吹かれをり
燭を手に巡る岩屋や冬ぬくし
冬麗の極楽寺から長谷に抜け
舞殿に白鳩群るる淑気かな
和菓子屋に佳き名の並ぶ松の内
さざめきて春着乗り来るエレベーター
松過ぎの郵便受をまた覗く

山河集

同人作品



神蔵 器選

奥飛驒の山燃え立たす寒茜

橋添やよひ

郡上輪

邑一揆傘連判状の凍つ
雪に足とらるる野麦峠の碑
数へ日の朝市に買ふ実蕎麦かな
アルプスを背負ひて下ろす屋根の雪

十二月宙に靴浮く飾り窓

百瀬 虚吹

冬はじめ齒根を写すレントゲン
冬初めゴムの沓履く椅子の脚
向き合ひて磨く硝子戸冬あたたか
飴切つて調子高まる初大師

短日や車で巡るむつ湊
蕪島の社の裏の雪ばんば

小林 共代

葦毛崎狐出るてふ展望台
蟹が家の大根低く干されをり
冬の浜天使の梯子斜ひに

池田加代子

数へ日のもう一日を探しぬる
極月や三条よりの刃物研ぎ
斑鳩の冬田に三寺の塔のぞむ
川三つ出合ふ草原冬雲雀
枯るる中入鹿首塚前に立つ

水井千鶴子

千年の寺領を囲む冬木立
秘仏の扉ひらく寒菊明りかな
枯蓮の水に伏したる甕一つ
枯菊の一途の色をいとほしむ
神々の近くに咲いて冬ざくら

風土独語／神蔵 器



雨も降らぬに袖しぼる

(かわさき)

寛永年間（一六二四〜四四）藩主遠藤慶隆のすすめではじまった郡上踊りは、三百余年を歌い踊りつがれているが、一揆の悲しみが消えるものではない。傘連判状も凍りつく思いである。

十二月宙に靴浮く飾り窓

百瀬 虚吹

邑 一揆傘連判状の凍つ

橋添やよひ

傘（からかさ）連判状は、円の周りに放射状に署名または押印する連判状で、発起人や代表者を隠す場合や連署人が平等に責任を負い団結する意志を強調する場合などに使う形式である。特に一揆の場合は主謀者は極刑はまぬがれなかったから、何とか主謀者を隠そうとした悲しい知恵であった。

話は少し飛ぶが、私の生まれた鶴川村能ヶ谷（現町田市能ヶ谷町）には能ヶ谷神社があるが、古者たちは今でも権現様と言っている。不思議に思っただけ聞いてみると、年貢が四公六民から六公四民、「菜種油と百姓はしほれば搾るほど出る」という苛酷さ、その上、農繁期などに関係なく村の若い人を賦役に徴集された。つまりかねた村人は相談して村に権現様を祀った。権現様を祀ることによって幕府に忠誠の証を見せて、せめて農繁期の若人の賦役ぐらゐは免除してもらおうとしたとのことである。

「農は国の基」といった家康のお膝元でもこんな有様であったから、追いつめられた百姓は一揆を起こしても、起こさなくてもあるものは死であつたろう。

郡上のナーハ幡出てゆくときは

今日では銀座あたりの個人商店ばかりか一流デパートでも、特に女性用の靴であるがシューウィンドーに飾つているところがあつた。とても一般には向かないような派手で、豪華というより華奢なものが多いのだが、何しろ若い女性は五寸釘のような高く細く鋭いハイヒールを平気で履きこなすのであるから恐れる。本来女性の方が美に繊細で、ファッションには敏感なのだ。

私たち男性、それも老人は、女性は素足は夫以外には見せない、そんな教育の名残が残っているのか、女性の靴などのぞくことはないし、ましてシューウィンドーの「宙に浮く」靴などを見ようともしない。しかし、このように表現されると意表をつかれたかたちである。「十二月」の季語がうまく不動の作品となつた。

冬の浜天使の梯子斜ひに

小林 共代

「天使の梯子」は、NHKの朝のドラマ「まんてん」の中で説明された気象現象についての言葉で、雲の間から日の射す日矢のことを言うようである。前に持田さんであつたか「天使の梯子」を使つた句があつたが、その時は採れなかつた。それ自体いい言葉は、その部分だけが浮き上がって一句が安定しないものである。

この句は「冬の浜」で、あまり欲を出さなかつたのがよかつた。

豆買の残してゆけり冬日向 高村 令子

豆は食用とする大豆、小豆、隠元などであるが、一般的に豆といえど大豆と思つてもよいであろう。私の実家の町田市などでは大豆は畑に作付けするが、小豆は自家用として田の畦に田植えの終わったところで蒔き、稲刈と同時に収穫する。隠元は種を採るより若いものを莢でもぎ、茹でたり煮たりして食べる。

作者の岡山県勝北町奈義町は穀倉地帯の一部を成しているが、大豆はどうなのだろうか。作者は現在はユニット社を退職されていられるが、農業は自給自足程度ではないか。とすれ豆買に売つたのは大豆より小豆ではなからうか。失礼ながら自家用のわずかな小豆を売つてしまつた寂しさ、しかし後には冬日向が残つていゝる。ささやかな幸福感。

一公演終へし衣裳や冬の蠅 柿沼 盟子

この公演は地方公演であろう。地方公演は、その時によつて違ふであろうが、通常は遠隔地から一日一日と公演をし、だんだんと東京に近づいて帰つて来るのではなからうか。

女優という名は華やかであるが、地方公演でも喜びも、生き甲斐を感じることも多々ある反面、厳しく辛いこともまた多いことであろう。一公演終わった衣裳はどこからか一匹の冬の蠅がついて来た。その冬の蠅は昨日までの公演を思い出しているのかじつと動かない。作者も意外な冬の蠅の出現に驚き、じつと冬の蠅を

見つめる。そのうちいつの間にか冬の蠅は消え、眼前の衣裳を着て舞台に立つている自分自身が見えて来る。多くの子供たちが目を皿のようにして見つめる熱い眼差しを全身に受けて熱演する女優盟子がそこに居るだけだ。

冬怒涛の立ち上がる時息吸ひぬ 池田 光子

健康を保つ呼吸法は一、二で息を吸い、三、四、五、六でゆっくりと息を吐くことだそう。私はかつて上野の牡丹園で、吸ふよりも吐く息大事牡丹咲く

という句を作つたことがあつた。冬濤の立ちあがる力は絶大である。その冬濤の力を借りるように作者は大きく力強く息を吸つた。桂郎賞受賞の希望の星の作者、これから如何に自らの息を吐き出すか楽しみである。

まつすぐな夜の農道をゆく聖菓 本間魚太郎

私は作者を全く知らない。その上この句は初投句である。句意は、まつすぐな夜の農道を聖菓が行く、というのである。聖菓は人間が両手で捧げるようにして、左右どちらにも傾けず平らに持つているのであろう。しかし一読したところ収穫も終わつて全くの冬ざれの広大で真つ平らな田野に、果てしなく続く農道、しかも真つ暗闇の中を聖菓が行く。聖菓に聖菓の匂いもなく、聖菓を持つ人間も見えず、聖菓が行く理由も目的もない。ただ暗いまつすぐな夜の農道を聖菓だけが行く。不気味というか、異様な感じを受けた。

風土集



神蔵器選

霜晴れや鳥の目にある海の色 東京 林 裕子

一斗釜据ゑ影氷る峠口

風花や竹の触れ合ふ音の中

月育つ菊坂下の焼諸屋

一山へ帰す数百の寒鴉

室咲きにややも疲れの中なかび日かな 東京 柿沼 盟子

一公演終へし衣裳や冬の蠅

寒菊の薰り束ねて麻の紐

日当たらぬ場所より清め年用意

ポインセチア市民の「第九」コンサート

冬溝の立ちあがるとき息吸ひぬ

僧一人耳門より出る寒の月

足跡の砂丘につづく冬の海

初詣磴の上なる青き空

初明り桜木の芽のくれなゐに

和歌山 池田 光子

冬晴や嘘のごとくに墓石あり 高砂 本間魚太郎

まつすぐな夜の農道ゆく聖菓

なやましき不良のたまる枯野かな

二枚舌持ちて持たされ冬の川

沢庵の齒に疲れたる母眠る

数へ日のひと日を山の美術館 横浜 平田紀美子

ポインセチア咲く教会の児童劇

マンシヨンのピロテイに来て焼諸屋

風花や女神の裳裾翻る

しまひ湯に竹炭入れてありしかな

浮くやうに手提に仕舞ふ寒卵

てのひらにまろめて寒の化粧水

着ぶくれて漢和辞典のごとき女

大見得を切り裸木の天へ向く

身のうちに火種抱へて着ぶくるる

東京 柴田 久子